



湯上 駿

9月27日、28日の2日間、国立病院機構和歌山病院にて臨床実習をさせて頂きました。到着したとき、大学病院とは異なり、まさに「まちの病院」という印象を受けました。しかし、結核病棟を見学させて頂くと、結核予防に特化した施設を目の当たりにし、その印象は少し変わりました。陰圧室や風のカーテンなどは知識として知っていたものの、実際に見るとより理解が深まりました。

駿田先生の結核の講義では解剖学をまじえながら、発症機序や好発部位を論理的に教えて頂き、今まで丸暗記していた部分を系統立てて理解することができました。

南方先生はインパクトのある人柄と、今までとは異なった切り口のレントゲン読影講義がとても印象に残りました。レントゲン上で、そこに映り込む組織を影絵にたとえて教えていただくことでレントゲンへの苦手意識が克服でき、むしろレントゲンが好きになれるほどでした。また「なぜその場所にその形の影が映るのか」「そもそも胸部レントゲンに映る正常組織には何があるのか」といった基本的なことや「シルエットサイン陽性/陰性とそのときに考える病変の部位」なども教えていただくことができ、非常に貴重な体験になりました。ブロンコ体操では今までうろ覚えだった肺区域を身体で立体的に覚えることができ楽しかったです。

人工呼吸器の実習/講義では実際に人工呼吸器を装着させて頂き、少しではありますが、患者さんの気持ちを感じることができました。普段何気なく見ていた人工呼吸器は実際使用してみると、想像以上に息苦しくストレスのかかるものでした。

また南方先生には医学以外のことも教えていただきました。ご飯に連れて行っていただいた際に聞かせていただいた和歌山の昔話や偉人のお話はとても興味深いものでした。

「留学中に和歌山のことを尋ねられて何も答えることができなかつたから調べた」と聞き、「自分もあまり和歌山についてよく知らないな」と感じ、医学だけでなく自分の生まれ育った地の知識も身につけよう、と思いました。

2日という短い期間でしたが、知識だけでなく貴重な体験も多くさせて頂き、たいへん実りの多い実習でした。ありがとうございました。